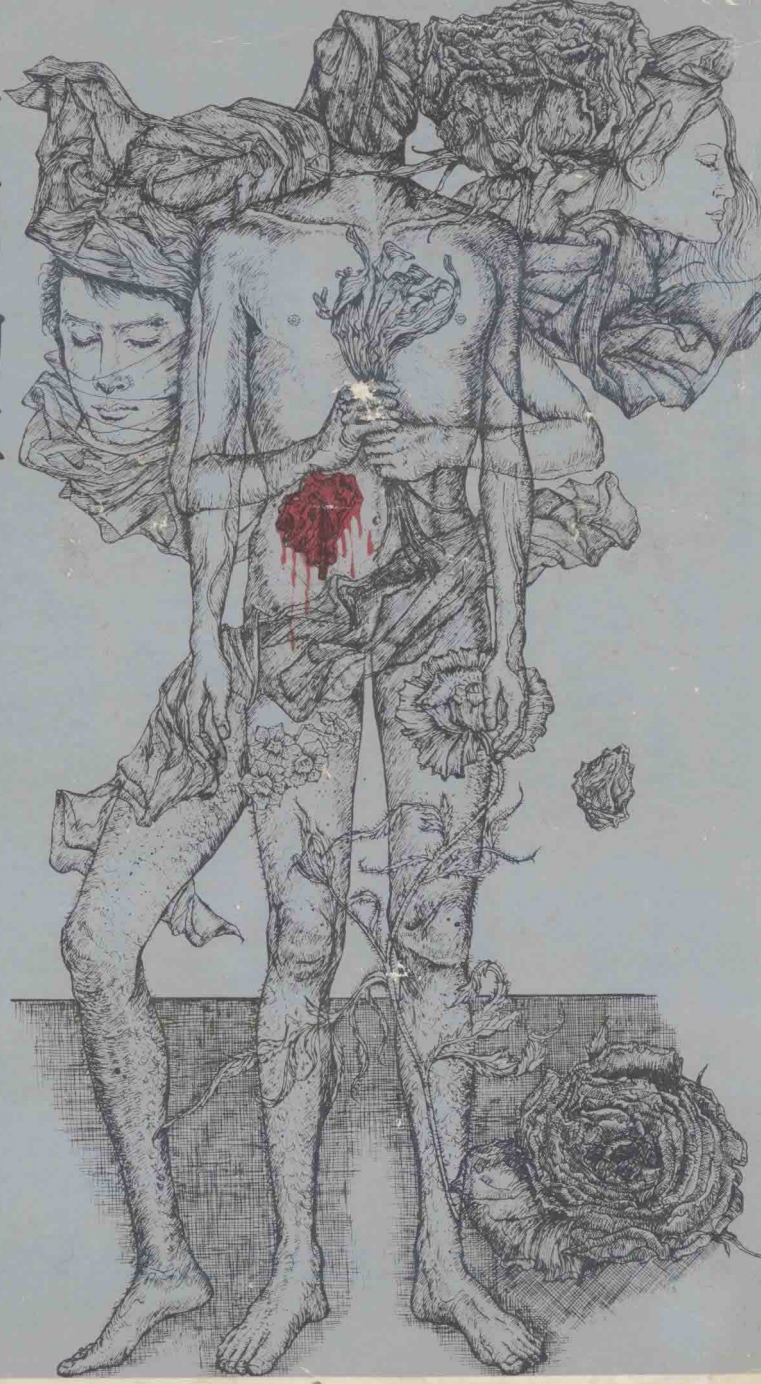
青銅物語

加堂秀三



角川書店

青銅物語　加堂秀三

角川書店

青銅物語

加堂秀三

昭和五十年一月十日　初版發行
昭和五十年五月三十日　五版發行

発行者　角川源義
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
郵東京一九五二〇八　郵一〇二
電話東京（二六五）七一一一（大代表）
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan
0093-872135-0946(0)

目次

序章　島――五
第一章　青銅の花――七
第二章　蜜蠟――五七
第三章　花鞠――二〇七
終章　声――二四六
あとがき――二五一

装画・装幀　村上芳正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

青銅物語

序章　島

明け方、波の音を聞いて勲は眼をさました。苦しい目覚めだった。

首をめぐらすと、吹雪の彼方に島が見えた。雪の檻に閉じこめられた白い生きもの、そんなふうに見えた。

彼はすぐ、自分がその島にいるのだから、自分に自分のいる場所の見えるわけがないというようなことを考えた。気持をしっかり持たねば駄目だと思った。

しかしそう思っても、なお島が見えた。囚われの白い獣のような島が朧に見えた。

彼はふと、無宿人や貴人や僧侶など、むかし島へ流されたというひとたちのことを想った。それら島流しにあったひとびとに、奇妙な親しみを感じた。

しばらくして、彼は無宿人、貴人、僧侶らに混って、真規子が島にいるのを見つけた。島と彼とはずいぶん離れている筈なのに、真規子の黒い素直な髪の様子も、髪に半ばかくれている耳の形も見えた。

こっちを向いてくれないか。彼は心でそう念じた。重い熱い頸をもたげて叫ぼうとした。けれども真規子は彼に気づかず、島のひとたちと一緒に、無心に鳥を追ったり地面の雪を掻いたりし

ている。たとえ勲に気づいても、気づかないふりをしなければならないのかも知れなかった。

勲はそのとき、真規子のいる雪の庭に、牡蠣や鮑が幾つも転がっているのを見つけた。牡蠣はまだいいが鮑は片貝だから、真珠色の肉を雪に晒され辛そうに見えた。彼は涙ぐまずにはいられなかった。涙ぐむくらいしか自分には何も出来ない。そう思うと無力感が募って、彼は泣くことも出来なくなった。ただ雪晒しの鮑の肉をじっと瞶めた。健気に雪掻きなんかしている真規子がどんな暮らしをしているか、大概わかったが、それも勲には、とやかく口出し出来ることではなかった。勲は眼を閉じた。

同時に真規子がやっと、こっちを見てくれるのがわかった。眼をつむっていてもハッキリわかった。

勲は心で礼をいった。そして、いままでだって俺、少しもマキのこと、恨んでなんかいなかったんだ、むしろこっちが謝りたいと思っていた、そういおうとした。いおうとしたが、いえないので、顔の表情でそれを真規子にわからせようと努めた。

真規子が何度も頷いた。指先で、拳で、忙しなく涙を拭いつつ、ええ、ええ、ええ、わかったわ、有難うというふうに頷いた。

勲はもう何も思い残すことがなかった。

第一章　青銅の花

1

長浜勲が青銅で花ばかり作っている女流鋳金家・稲垣真規子に会うために、佐渡の五十里というところへ向ったのは、昭和四十八年一月十九日のことである。

まだ『箕輪』という旧姓を名乗っていたころの真規子に、勲が新聞にいわせると『愛情のもつれが原因』で、手ひどい傷を負わせてから、足かけ四年の歳月が流れていた。

勲の姉婿・高木卓二は、記録映画専門の監督兼プロデューサーで、勲と真規子が大学生活の延長で目白に部屋を借り、いま思うと甘あましい暮らしをしていた当時、まだ或る手堅い映画会社へ勤めていた。しかし、二年前から独立して田村町に事務所をおき、現在は主としてテレビの教養番組むけの映画を製作している。今年十月から或る民間放送会社でスタートする予定の三十分番組『女流』のシリーズも、その仕事の一つであった。

真規子を失って以後、半ば廃人のようになり、一時郷里の新潟へ帰っていた勲は、高木が独立

するときメンバーのひとりに加えて貰い、やっとこのごろ仕事にも慣れた。彼は一応、練馬にある大学の、映画科というところを卒業していた。

けれども、『女流』シリーズ第一回目放送分の『青銅の花』は、ほかの仕事とは違う。勲を連れていくとまた何か禍禍しいことが起きるのではないか。姉の信江が姉としてより、まだ基礎が固まったばかりの夫の会社を気づかう気持から、そういって心配した。

しかし高木はこだわらなかった。

「なァに、若旦那ももうそれほど坊やではないさ」

彼は昔から勲のことを、『若旦那』とか『坊や』とかいって揶揄する癖があった。

勲はこのごろ高木のそういう物のいい方にも慣れたが、高校生の頃はずいぶん反撥を感じた。高木は勲が厭がれば厭がるほど、なおそれをいい、面白がった。

「それに、そんな若旦那の古い恋物語なんかにかかずらわっていられるほど、うちは大勢スタッフがいるわけじゃないからな。第一、今年の佐渡は大雪だ。珍しいんだそうだ。雪に慣れた人間がいないと困るよ」

「そうさ。大丈夫さ」

勲もびくつきはしなかった。

こうして彼は二度と逢えようとは思わなかった真規子に、まさかメロドラマがぶり返しもしないだろうが、厳冬の佐渡ヶ島で再会することになったのである——。

「いや、こりゃ何度見ても、恐ろしいようなデカ雪だな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

弁当を食べ終って、高木がタバコをつけた。
暖房が強すぎるくらいなのに首から放さないシナシナした絹物のマフラーが、彼をややヤクザっぽく見せている。
前橋を過ぎても、冬枯れの野に風が吹き、薄陽が差しているだけで、雪は見えなかった。ところが水上に近いあたりからだんだん雪がふえた。いまは列車の線路ぞいに、目分量でも二メートルはある雪の断層が見えている。何度にもわけて降ったのだろう。ちょうど土質の面白い崖を切り取ったように、少しずつ汚れの違う雪の層ができていた。
「これ以上、遅れないで着いてくれればいいんですがね」
勲は列車が上野を出てから、もう何度繰り返しているかわからないことをいい、また腕時計を見た。
十一時すぎている。さきほどの車内放送によると、列車は十分ほど遅れている。
予定では、午後一時三十分に列車が新潟駅へ着くことになっていた。高木と勲の乗りたい佐渡汽船の『おおさど丸』は、二時ちょうどに新潟港を出る。それを逃すと次の船便は五時三十分までない。
予定どおり行けると船は四時三十分に両津港へ着くが、あとの便だと、両津着が八時になる。
急ぐようで、一刻を争うというような旅ではなかった。しかし規模の知れている会社が、限られた予算内で仕上げなくてはならない仕事である。高木も勲も、行きがけ、佐渡海峡や船から見えだす佐渡ヶ島を、カメラにおさめたいと考えていた。そのためには真っ暗な海を渡り、まっ暗

な島へあがる、そういうことになるのは困る。
「まあ、いよいよ駄目なら、徐徐に船が島へ近づいていく、あそこの絵はやめるまでさ。気を揉むな」
高木がむしろ慰め顔にいった。
コンテはあくまでコンテだ。それにこだわってはいけない。縛られるな。そんな心の硬いことでは、映画の仕事はできない。絵が死んでしまう。——それが持論の彼は、度胸がよかった。けれども勲はやはり雪で真っ白な島の全景を、たとえワン・ショットでも入れたいと思った。
「連中、どうしてるかな」
同行のカメラマン二人、録音技師ひとりが、みな別べつの車輛に、離ればなれになって乗っていた。
「見てきましょうか」
「いいさ。こう混んでいては、通路も歩けんだろう」
何か適当に、飲んだり食ったりしてるだろう。そういい置いて、高木が眼をとじた。
大雪で、このところ上越線、信越本線の列車には、運転休止や延発、延着がつづいていた。乗客には、この列車に乗らなければ、こんどいつ乗れるかわからないという不安があった。
勲たちのようにちゃんと指定席券を持っていても、今朝上野で列車に乗りこむまでは、ほんとうに時刻表どおり列車が動くかどうか、心もとなかった。
「まったく、ラッシュ・アワーの通勤電車なみだものな」

高木が眼を閉じたまま、通路に立っているひとびとのことをいった。
勲はぱらぱら週刊雑誌のページを繰ってから、高木に倣って眼を閉じた。普段以上にあわただしい、思いがけないことのいっぱい起る旅になりそうな気がふっとした。

*

高木が勲を新橋演舞場三階にあるおでん屋へ連れて行き、初めて『青銅の花』の計画を話したのは、つい一週間ほどまえの夜のことである。
勲は高木の下で、助監督とも記録係とも、また秘書とも脚本家ともつかない仕事をしていた。
「どうだったい。いまの」
高木が、それも『女流』シリーズの中へ入れる予定の、囃子方のことをまず訊き、勲の返事を待たずに、
「佐渡へ行ってきたよ」
と切りだした。
「土曜日の朝発ち、日曜、――昨日、夜帰ってきた。いやァ、船はすいていたけど、行き帰り、汽車が混んで閉口したよ」
勲は黙っていた。
彼は自分を捨てて著名な鋳金家・稲垣清蔵のもとへ奔った箕輪真規子が、三年前から佐渡に住み、姓も稲垣になって、ぽつぽつ作品を発表しているらしいのを、美術雑誌などで読みかじって

知っていた。
高木から『女流』シリーズが始まると聞いたとき、真っさきに浮かんだのも、真規子のことであった。
しかしテレビ局のプロデューサーもまぜて行われた打合わせの席でもその後でも、高木は真規子のことをいいださなかった。無論、勲は黙っていた。
それなのに高木はいま、
「佐渡へ行ってきたよ」
と切りだした。
勲は重苦しい気持で、高木にさされた盃をほした。
佐渡には無名異焼や竹細工の仕事もあるそうだから、それら土着の工芸のほうで、誰か有能なひとが見つかったのではないか。そう考える余地はあったが、やはり平静ではいられなかった。
「こんどの『女流』に取りあげるひとは、――その人選の基準は、もう何度も話したように、まず仕事の優秀なひとだ。主婦で、片手間に仕事をしているようなひとは、第一に除く」
「はあ」
「次に、仕事はよいけれども、まだあまり世間に名を知られていないひとが望ましい。有名なひとは、テレビではともかく、雑誌や新聞で、さんざん取りあげている。もう新しく話すこともないだろうし、こっちも訊きだしようがないからな」
「そうです」

「となるとだ、――仕事はよいけれども、まだ無名か、それにちかいひととなるとだな、どうしても若いひと、ということになる」
ロビーを、柝の音が流れてきた。
「いいさ。もう見なくていいんだ」
高木がよそ見する勲にそういい、
「若いとなれば、まァ、出来れば美人のほうが有難いじゃないか。人情だ。絵がキレイになる。見るひとも喜ぶ。我我だって、愉しいや。あとひとつ贅沢をいうと、そのひとの人生に『ドラマ』があればさらにいい」
それらすべての条件に、箕輪真規子、いや稲垣真規子さんは適っている。――高木が、『真規子さん』の『さん』を字で書けば、片仮名の『サン』にならざるを得ないようないい方をして、勲の顔を覗きこんだ。
「だから行ってきた。行って、彼女には勿論、旦那、いやこういっちゃいけないな、――その、稲垣清蔵先生にも逢ってきた。そして承諾を得てきたよ。シリーズ第一回目に放送予定だというと、先生もまんざらでもなさそうだった。そりゃまァ、マキちゃん、――真規子サンの気持の中まで見てきたわけじゃないからな、彼女がどう思っているか、そこまでは知らない。が、なにしろ彼女は、旦那のいうこと、――先生のお言葉には、完全服従らしいからな。しおらしいものだ。帰りには、よろしくお願いしますって、そういってたよ」
それに彼女、君のまえだけど、綺麗になってた。昔も綺麗だったが、あの時分はなんといって

もまだ少女少女していた。稚かった。それがいまはすっかり女っぽくなって、ちょっと好みは古いがいい着物なんか着てね、肌は白く髪は黒く、眼はしっとり濡れて、唇だけ、椿の花びらでも貼りつけたみたいに真っ赤でさあ。無論、子供もまだ生んでいないからね、体の線も崩れていない。ぴちぴちしている。それでいて、熟れきっている。——高木はまくしたてた。酒が、ふだんから達者な彼の口を、いっそう達者にしていた。

「古典的な形容ですね」

勲は笑った。

「さっきの舞台の影響かな」

「馬鹿いえ。これはリアリズムなんだ。——なんだい、お前こそ無理すんな。余裕、あり余ってますって顔するんじゃないよ」

それはそうとリアリズムといえばね、船の舳先に割かれる白い波頭ね、あれ見ていて気づいたんだが、ほら日本画や、そうだ、いま見た舞台装置にも、ずいぶん模様化された波があったじゃないか。あの波は、どうしてどうして模様なんかじゃない、じつにじつにリアリズムであるんだな。——高木の話はあちこちへ飛んだ。

「いうまでもないことだが、君も行くんだよ」

高木が真顔に戻った。これをいうために、——これをいおうとして気がひけて、彼は平素以上に饒舌になっていたのかも知れなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com